

廃校校舎を拠点とした地域資源活用による体験交流型コミュニティづくりプロジェクト

学生団体名：野外スポーツフィールドゼミナール（池田 幸應ゼミナール）〔金沢星稷大学 人間科学部〕

参加学生：荒山 昂士・池上 巨倫・宇波 圭祐・岡本 聡・金谷 教史・河崎健一郎

久保 拓郎・瀬戸ちぐさ・高松 雄平・松崎 睦

1. 地域活動の概要

穴水町において、平成20年3月末に穴水町立諸橋小学校、兜小学校、鹿波小学校が廃校となり、また住吉小学校が統廃合され向洋小学校となった。今回、その中で具体的利活用策が模索・検討中であった旧穴水町立兜小学校【写真1】を拠点とした体験交流型コミュニティづくりの一環として、この地域が保有している自然・歴史・文化について再認識し、伝統行事等への参加により、住民の方々と相互交流を深めた。これらの交流活動を通して、当該地域における“かぶとふるさと体験塾”（仮称）を提案した。



写真1 旧穴水町立兜小学校

2. 地域活動の具体的な内容

池田ゼミナールでは、継続的に穴水町に関わっており、昨年度も兜地区の廃校利用について取り組んできたが、本年度においては、野外スポーツの視点から地域資源を再確認し、活動をスタートさせた。

(1) 旧兜小学校および兜地区への現地調査

実施日時：平成21年6月25日（木） 開催場所：穴水町立兜小学校、兜地区公民館

まず、兜地区における地域資源の調査として、廃校となった旧穴水町立兜小学校や周辺地域【写真2】の視察を行った。同小学校は改築されてから約10年程しか経っておらず、非常に綺麗である。校舎は木造二階建てで、校舎内は木の香りも漂い、とても素晴らしかった。また、バリアフリーの設備も整っており、体育館も立派で、現在使われていないことが非常にもったいないと感じられた【写真3】。外に出てみると、校庭や相撲場、そして天然芝の大きな運動場があった。兜公民館館長 村上太一氏の話によると、この運動場は昔、当時の児童たちが根を起し、土を掘り、石を敷き詰め、その上に土を被せ固めて芝を敷いた“児童たちの自作”であると教えて頂き、校舎自体は新しいが、地域住民の思いが詰まっている小学校であると実感した【写真4】。



写真2 兜湾を眺める学生



写真3 旧穴水町立兜小学校体育館



写真4 ゼミ生全員が魅力を感じた校舎

次に、場所を兜公民館に移し村上さんと談話した。そこで、“兜は過疎高齢化が進んでいる”、“兜小学校が閉校し、まだ利活用が決まっていない”などの兜地区の現状や、同地区の伝統的な祭礼行事として8月の第3土曜日に「加夫刀曳き舟祭り」が行われることを聞き、その伝統や歴史についてお話して頂いた。昨年度、私たちの先輩がこの祭りに参加しており、“参加してもらって本当に助かった”、“若い人と交流できてよかった”などの地域住民の声もあり、今年は私たちも参加させて頂くこととなった。

しかし、昨年度においては、祭りの準備・後始末やその後の反省会には参加できず、所謂「お客さん」としての参加に留まったため、今回は、その多くの過程に積極的に参加し、地域の方々との相互交流を深めたいと考えた。

(2) 「加夫刀曳き舟祭り」参加への事前打ち合わせおよび兜地区周辺施設の視察

実施日時：平成21年7月19日（土） 開催場所：兜地区公民館

「加夫刀曳き舟祭り」参加への事前打ち合わせとして、兜公民館にて館長から祭りの概要について話を伺った【写真5】。「兜地区」は兜小学校の校下を示し、「黒崎、至誠、小甲、大甲、曾良、大郷」の6つの集落から成っている。一方「甲地区」となると、その中の「黒崎、至誠、小甲、大甲」の4集落を

示し、今回の「加夫刀曳き舟祭り」は甲地区で行われると教えてもらった。「加夫刀曳き舟祭り」の“加夫刀”については、この祭りの神社が「加夫刀比古神社」という名称が由来となっている。

また、祭りに参加するに当たっての注意事項として、祭りの特性上、船に乗るので気を付けるように言われ、またお酒を飲み過ぎないように自分の身体の健康管理しっかりとし、そして怪我をしないようにと言われた。

その後、兜地区の青年団の方々ともお会いし、祭りへ参加させて頂くことを伝え、兜地区の過疎高齢化から祭りの存続が難しくなっていることから、“若い人の力は助かる”と私たちへの期待が寄せられた。また、私たちの方から旧兜小学校跡地の利活用策について、協働で考えて行きたいと伝えた【写真6】。

その後、比較的近くにある廃校となった旧穴水町立松丘小学校の校舎を利活用し体験型宿泊施設となっている「ふるさと体験村 四季の丘」を視察した。四季の丘周辺には、まいもん体験農園やふれあい牧場などの、体験施設が整っており、これまでも四季の丘を拠点とした「こどもエコロジーキャンプ」や「ワーキングホリデー」等が継続的に行われていて、現在穴水町の体験活動の拠点の1つとなっている。



写真5 兜公民館館長 村上氏による話



写真6 兜青年団の方々と顔合わせ

(3) 加夫刀曳き舟祭りへの参加・交流

実施日時：平成21年8月22日(土)

開催場所：兜地区及び加夫刀比古神社境内



写真7 実際にゼミ生が担いだ神輿



写真8 地域の子どもの交流



写真9 参加した学生の集合写真

私たちは、朝5:00に大学に集合し、バスで現地へ向かった。7:00過ぎに現地に到着し、兜公民館で用意して頂いたハッピーを身にまとい、8:00頃から行われる祭りの始点まで移動した。加夫刀曳き舟祭りの特徴として船の上に2基の神輿を乗せ海上パレードを行い、海上安全、大漁祈願をする。その後、甲地区の4集落(黒崎, 至誠, 小甲, 大甲)を順に練り歩き、「加夫刀比古神社」へ戻るといったお祭りで、私たちも舟に乗せて頂いた。舟の上では、太鼓のパフォーマンスが練り広げられており、私たちも太鼓を叩かせてもらった。また、神輿を担ぐ勢いづくに、お神酒も飲ませてもらった。

舟を降りた後は、“チョーサヤー、チョーサヤー”の掛け声で、神輿を担ぎ、民家の前では“ワッショイ、ワッショイ”と神輿を上下に揺らした。

私たち学生の中には、神輿を担ぐという体験が初めての者もあり、予想以上の重さに顔を歪めていた【写真7】。休憩時には、地域の方々とお酒等を飲みながら、何気ない会話を交わし盛り上がった、また子どもたちとも仲良くなることのできた【写真8】。話の中で、祭りの歴史を聞き過疎高齢化により祭りが縮小化していることも聞くことができた。

祭りの最後は、約200段ある「加夫刀比古神社」境内までの階段を一気に上り、神社の周りを3周走った。最後の階段上りは、非常にハードで神輿を神社に納めた時には、私たち学生も地域の方々と共に達成感を味わうことができた【写真9】。

そして、祭り終了後には、各集落(黒崎, 至誠, 小甲, 大甲)で行われる反省会に学生が数人に分かれて参加させて頂き、さらに交流を深めた。

帰り際には沢山のお土産をもらい“また近くに来たら、いつでも寄ってかっしね”と、初めて会った私たち学生に対しても温かい声をかけてくださった。現地を離れたのは午後7:00を過ぎてしまっており、本当にまる一日の相互交流を深めることが出来た。

(4) 第54回穴水町駅伝競走大会への参加・交流

実施日時：平成21年10月22日(土)

開催場所：穴水町町内

私たちは、穴水町において継続的に行われている地域行事に参加することで、少しでも地域の活性化に繋がればと思い、「第54回 穴水町駅伝競走大会」に参加した。

当初の予定では、参加する予定はなかったのだが、「加夫刀曳き舟祭り」に参加したことにより、兜

地区に愛着を感じ、穴水町の活性化に関心を持った学生が多く、また私たちは「スポーツ学科」ということもあり、身体を使って何かできないかという思いから、参加するに至った。参加のために、兜青年団をはじめ兜地区の多くの方に、当日のお世話や交流会の準備・開催などを依頼した。また、ゼミナールとして、自分たちでデザインした T シャツも着用し参加に臨んだ。

同大会は、11月15日に開催される予定だったが、同町の新型インフルエンザ流行に伴う措置として、大会が1週間延期となり、翌週に開催された。当日、選手7名と記録係1名の計8名の学生が参加し、まず兜公民館にて、兜青年団や地域住民と顔合わせをし、注意事項や配車確認を行った。午前10時にスタートし、全7区間31.2kmをタスキで繋いだ【写真10】。特に、穴水を横断する本大会のコースは、第2区間で兜地区を通り、その際、私たちのTシャツを見て、地域住民の方々より“星稜大学、頑張れ～！”という温かい声を掛けてもらった。また、完走による達成感を兜地区の方々と共に味わうことができた。

大会終了後、場所を兜公民館に移し、駅伝大会反省会ならびに交流会を開催して頂いた【写真11・12】。その中で、“来年も駅伝に参加して欲しい”，“兜チームの一員として合同メンバーでタスキを繋ぎたい”などの継続的参加の声を聞くことができた。また、本年度10月に旧兜小学校が本学「地域連携・交流センター」としても開設したが、その具体的使用の可能性についても意見を交換した。



写真10 4区から5区への走者へタスキを繋ぐ



写真11 ゼミ生が青年団の方より花束を受け取る



写真12 交流会参加者全員での集合写真

3. 地域活動の評価

(1) 「加夫刀曳き舟祭り」や「第54回穴水町駅伝競走大会」の参加を通じた相互交流

まず「加夫刀曳き舟祭り」の参加においては、過疎高齢化が進み祭りの存続が危惧されている兜地区において、非常に重要な交流活動であった。また、「穴水町駅伝競走大会」においても、私たち学生が積極的に参加を希望し、兜青年団の方々とは連絡を取りながら、準備段階から活動を行うことで地域の方々とはさらなる交流が図れた。

(2) 「地域連携・交流センターかぶと」の開設

これまでの池田ゼミナールの取り組みが大きな原動力となり、旧兜小学校が「地域・連携交流センターかぶと」が開設された【写真13】。今後、本学としても農山漁村体験活動の拠点として活用していく方針である。私たちゼミナール学生もその中心として活動して行く。しかし、小学校はあくまでも地域の方々のものであり、思いが詰まっている。地域住民の声や思いを積極的に聞きながら、地域の方々とともに活用を進めていきたい。



写真13 金沢星稜大学「地域連携・交流センターかぶと」

4. 今後の課題

“かぶとふるさと体験塾”による体験交流型コミュニティづくりの提案

これまでの現地における交流活動を通して、人々の温かさ等、この地域における地域資源が豊かであると感じた。しかし、その半面、過疎化が非常に深刻であると実感した。このまま、加夫刀曳き舟祭りや駅伝競走大会のような地域の伝統行事が無くなることは、非常に寂しい。そこで、地域資源を活かした体験活動事業として“かぶとふるさと体験塾”による体験交流型コミュニティづくりを提案する。

具体的なプロジェクト内容としては、「地域連携・交流センターかぶと」を拠点とし、周辺地域の季節性を活かした農山漁村体験として、例えば<春：山菜とり，田植え等><夏：シーカヤック，フィッシング等><秋：稲刈り，栗拾い，キノコ狩り等><冬：牡蠣・なまこ加工等>の体験活動を展開し、加えて地域住民宅での民泊体験事業を推進して行く。また、それだけではなく祭りや駅伝大会等の地域での伝統行事への参加活動を盛り込んで行くことで、伝統行事への継続的参加者を確保することができ

ると考えられる。本事業の対象者としては、より多くの人々に体験してもらうため、町内外を問わない。町内の人が参加することで、地域資源の魅力の再認識に繋がり、また町外からの参加者においてはこの地域の魅力を感じさせることで、継続的な参加が期待でき、相互交流により、交流人口の増加に繋がることが期待できる。

また、四季の丘周辺をはじめ、穴水町が保有している他の体験フィールドと連携させることにより、兜地区周辺だけでは困難な活動を展開することが可能となるものと推測され、この点に関しても今後の検討が必要である。

5. 今回の交流・連携活動より

● 地域の方々の声

・兜青年団団長 高尾智之氏 [写真14]

“学生の皆さんが、昨年度より加夫刀曳き舟祭り、そして加えて今年度、駅伝大会に参加して頂き、兜地域に新しい流れができています。とても新鮮な気持ちで兜にとっても、すごい活性化になっているように思います。今後の青年団としての学生の皆さんとの新しい取り組みが、兜地域だけではなく、穴水、奥能登全体の活性化に繋がれば良いと思います。”



写真14 兜地区住民

・兜青年団 丸山敦史氏 [写真15]

“過疎化が進み、高齢者の多い兜地区にとって若い世代の学生の皆さんが地域の方々と一緒に地区の行事や活動に参加してくれて本当に助かっているし、とても明るい話題です。引き続き学生の皆さんに伝統行事を盛り上げてもらい、そしてこれから新しいことを私たちと一緒にやってもらいたいと思っています。学生の皆さんと何かが出来るといことはとても嬉しく、ワクワクしています。”



写真15 兜地区住民（右側）

○ 学生の声

・金沢星稜大学 人間科学部 スポーツ学科 3年 宇波圭祐 [写真16]

旧兜小学校の視察においては、自然環境が良く、体験活動を行うのに適していると思った。また、祭りや駅伝大会においては、一緒に活動をし、一緒に達成感を味わうことができ、本当に身近な存在に思えるようになった。今後も、積極的に地域における課題に目を向け、自分の力が少しでも地域への貢献に繋がるように、活動を継続して行きます。



写真16 駅伝に参加した時の様子

・金沢星稜大学 人間科学部 スポーツ学科 3年 松崎 睦 [写真17]

私は、加夫刀曳き舟祭りや駅伝大会など、直接兜地区にて活動をしてきて、本当に温かく迎えてくれた兜の方々に感動しました。特に駅伝大会の当日は、ちょうど私の誕生日でもあって、サプライズで地域住民の方から花束を頂き、本当に嬉しかったです。この1年で、現地に行ったのは数回ですが、兜のことを本当に好きになりました。今後、穴水町、そして兜地区のすばらしさを、私の周りの人にも広げて行きたいと考えています。

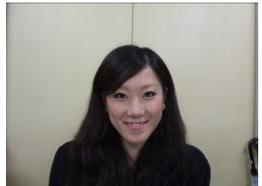


写真17 参加した女子ゼミ生

◎ 本学ゼミ生であり兜小学校出身者の声

・金沢星稜大学 人間科学部 スポーツ学科 3年 岡本 聡 [写真18]

小学校が廃校になり、兜地区の若い家族は中心市街地へと越してしまい、過疎化がさらに深刻となってしまった。そのため、母校である小学校の廃校利用に取り組むことができ非常に嬉しかった。学校とは、地域に根付くものであり、運動会など人々が集まる役割を果たす、地域住民にとっては欠かせない存在であると私は考えている。そのため、地域の活性化において非常に重要となる拠点であるといえる。今後「地域連携・交流センターかぶと」において、今回の提案“かぶとふるさと体験塾”をスタートさせ、この地が笑顔で溢れることを期待し、そのために尽力して行きたい。



写真18 兜小学校08であるゼミ生

**来年はゼミ生全員で“かぶとふるさと体験塾”
の塾生になるぞ！**